

研究会報告

2013年 3月2日(土) 定例研究会報告

定例研究会

合評会：藤本一美著『現代米国政治分析—オバマ政権の課題』(学文社、2013年)、
菅野 淳 著『米国のリバタリアニズムと「新保守主義」』(志學社、2013年)

報告者：藤本一美(本学教授)、菅野 淳(臨床政治研究所主任研究員)

時 間：14:00—17:00

場 所：専修大学神田校舎13A会議室

参加者数：18名

報告内容概略：

今回の研究会では、藤本一美著『現代米国政治分析—オバマ政権の課題』(学文社、2013年)及び菅野淳著『米国のリバタリアニズムと「新保守主義」』(志學社、2013年)について、著者がそれぞれ著作の概要を報告した後、討論者による批評が行われた。

藤本の報告では、2012年大統領選挙が現職B・オバマ大統領の再選に終わり、2013年1月から政権二期目がスタートしたことを踏まえ、近年の民主党と共和党の二極に分断された「政治構造」、「リベラル」と「コンサバティブ」勢力との「イデオロギー的対立構造」、変化を訴える左右両派による「社会構造運動」の三つの構造を分析枠組みに据え、オバマ政権の一期目における「内政」及び「外交」の課題などを分析した。

菅野の報告では、米国における「大きな政府」及び「小さな政府」の対立を概観しながらリバタリアニズムの諸原理を述べた。そして「保守」と「リベラル」の対立軸を相対化し、貿易政策、社会福祉などにおける双方の立場を考察することで、リベラリズムの特色を抽出した。

討論者及びフロアからは、藤本の著作に関して、本書が最新のものであり、オバマ研究を行う研究者には第一の参考文献となるであろうこと、オバマだけでなくロムニーの人物像にも詳細な考察が加えられていること、分極化の「政治構造」及び「イデオロギー的対立構造」の象徴的事象である連邦政府債務上限問題、2016年大統領選挙の民主・共和両党の候補者選抜などについて、質問がなされた。他方、菅野の著作に関して、従来の対立軸ではとらえきれず、メディアによっては誤解されている「リバタリアニズム」を解きほぐし、その起源から近年の展開までをコンパクトにまとめたこと、「新保守主義」、「コンサバティブ」並びに「ニューライト」の間の語句の相違と定義の厳密化、リバタリアニズムにおける個人と社会の関係性などが討論され、活発な議論が交わされた。

記：専修大学法学部・藤本一美